二〇二五年一二月二〇日

氷見の海逆巻く波や鰤起こし　ふさこ
一客にあれこれ忙し布団干す　澄子
嵩なせる離れ座敷の散紅葉　やよい
赤い羽根募金大声の児の箱に入れ　なつき
帯なして揺らぐ潮目の浮寝鳥

二〇二五年一二月一九日

青空に編み目をなせる枯木立　ぽんこ
嬰の名も宛名に加へ年賀状　康子
前撮りの二人に吹雪く色葉かな　やよい
お下がりの大根抱いて家路へと　なつき
寒夕焼遠く影絵に摩天楼　あひる
葉を落としつつ蝋梅のふくらみぬ　よし女
お天気の今日とばかりに布団干す　うつぎ

二〇二五年一二月一八日

大樽を売り台として千枚漬　あひる
駅下りて甘南備山へ冬田道　せいじ
山眠る背鰭の如き尾根の松　うつぎ

二〇二五年一二月一七日

小春空へとひとすじの杣けむり　あひる
読みかへす悲喜交々の古日記　たか子
歳暮れぬ二人三脚医者通ひ　ぽんこ
姿見のよく磨かれて冬座敷　澄子
バスローブ柚子湯上がりの香を包む　康子
積ん読の山に埋もるる小夜時雨　もとこ

二〇二五年一二月一六日

朱のジャケツ娘のお古だと言訳し　あひる
目つぶしの落暉を透かす枯木立　康子

二〇二五年一二月一五日

鳩どちの斥候ならび冬の浜　うつぎ
一と所裂けて日矢射す片時雨　よし女
獣道あらはとなりし枯野かな　澄子
六尺の婿頼もしき煤払　澄子

二〇二五年一二月一四日

人形のサンタ窓辺の鉢植に　たか子
無事検査終へて小春の一万歩　康子

毎日句会みのる選・二〇二五年一二月二二日